



NPO法人災害救助犬ネットワーク
DISASTER RESCUE DOG NETWORK

認定審査に対する考え方

災害救助犬の能力判断は犬の嗅覚だけに視点が行きがちですが、過去の教訓、現実の課題からは指導手、チームの能力が問われる総合力と考えています。

そのためには社会の要請、期待に応えられる犬、指導手を育成、輩出することが認定審査会を主催する私たち責任であると考え、その求められる犬、指導手の能力、チームの能力の一定基準として必要な作業錬度を確認するために実践を見据えた審査を目指しています。

災害現場では必ず正解がる平時の訓練と逆に要救助者に遭遇することは皆無に近い。その中で要救助者救助に向けた作業が求められます。平時の感覚で対応すれば、犬の挙動に「反応」「反応」と云って救助隊を振り回すことになり、その「反応」のいい加減さに信頼を失います。例えば、雑踏で混乱する現場における指導手の冷静、客観的な判断、行動、待機しているときの状態、指示に従い作業できるが自主性もある、必要な時に作業態勢に入れる、周囲の環境、状況に影響されないなどが問われます。

犬を現場で安全に、確実に作業させるのは指導手の能力次第です。そして状況判断、チーム活動への認識、救助隊との連携等々、実働「捜索犬」の認定は犬だけではなく指導手が現場で求められる能力は多岐にわたり、犬以外も審査対象とすべきと考え、消防救助隊の審査員も加えています。

一方、実働を目指し、その過程にある犬、指導手らに実働とは異なる活動の場を広げるために実働可能な認定に至る前段階として、防災訓練、広報デモの分野において指導手に経験値を増すために活動できる広報活動も重要な役割と位置づけています。

以上の考え方から、「広報犬」「捜索犬」を分離して審査し、その専門性をそれぞれの分野で能力を発揮できるように選択できるようにしています。

しかし、社会から見れば同じ災害救助犬であり、実働はしないが、広報活動において社会の期待を欺かない災害救助犬の基礎能力を備えていることが条件としています。

また、緊急事態に対応できる体制づくりのためには、日常的な犬の能力向上だけに偏らず、それに応じた指導手の能力、意識向上も求められているため、基礎訓練と災害実働の狭間にある認定審査は訓練、出動等と密接に関連性をもって構成しています。

出動対応を見据えた認定審査会、災害救助犬の社会的な認知向上とする認定審査会の趣旨を鑑み、それぞれ認定後における認定レベルの維持チェックは訓練会において行い、努力、向上心を怠らないように年に一回の訓練会への参加を義務化しています。

また、人命にかかわる活動に携わる以上、認定制度は厳しい社会、行政、救助隊からの要請に応えるために自己規律として合理性、客観的社会性を保たなければなりません。

NPO 法人として限られた資源で活動している現状から、認定審査会の開催は財政的に厳しいことではありますが、自らで賄えず社会の支援を仰ぐ現状を真摯に受け止め、社会が求める災害救助犬を輩出すること、内部の論理を優先しないこと、対外的に合理的説明できる認定制度であるとともに、併せて災害救助犬が注目を浴びる反面、災害救助犬の能力、特性を無視したパフォーマンス行動から批判を受けることもあり、常に社会とともに歩んでいく立場を忘れず、公の活動でも自覚して行動していかなければならないと思っています。

私たちだけの自己満足のための認定審査会や組織にならないように心掛け、社会貢献のために必要な自己改革を続けていくつもりです。